

看護学科学生によるカリキュラム総括評価

三島三代子・田原 和美・吉川 洋子・加藤 真紀

概 要

2009年度卒業予定の看護学科3年次生を対象に、無記名自記式質問紙によるカリキュラム評価を実施した。評価内容は学習領域、授業（実習含む）全体、学習支援状況、学生の特性評価である。評価は、看護学科の全カリキュラムを終了した2010年1月に実施した。その結果、卒業時点の学生の評価は高く、教育目標に照らして学生のほとんどが求められる力を身につけていた。特に倫理的判断や態度、他者理解に関する評価が高かった。また、学習領域・授業全体・学習支援状況も全体的に評価が高く、学生は本学で学習したことを良かったと評価したが、一般教養科目、選択科目数、パソコン・インターネット環境は課題となった。

キーワード：カリキュラム評価、看護学科、学生

I. 緒 言

本学看護学科では、2001年度に学生・教員を対象としたカリキュラムについての質問紙調査を実施した（島根県立看護短期大学自己評価委員会、2004）。それ以後、教養・基礎教育分野の科目の見直し、臨地実習の時期、看護特論と卒業研究の必要性・位置づけ・時期、各科目間の連携、時間割の見直し、前期と後期の区切り・通年科目や試験期間、実習に対する履修条件の付加などの課題について検討を重ねてきた。そして、教養・基礎科目の整理と新設、看護特論の継続と位置づけの再確認、卒業研究の2年次講義と3年前期の演習への変更、実習以外の通年科目の廃止、看護実習の履修条件の付加、科目間の教育内容の重複・分担の見直しと連携強化などを行い、2005年度からカリキュラム改正を実施した。しかし、2001年度以降、科目単位の授業評価は実施してきたものの、カリキュラム全体の評価は行っていなかった。継続的にカリキュラムの総括評価に取り組んでいる大学もあり、学科の教育改善につなげている例も報告されている（及川他、2006、菱沼他、2006、野田他、2005）。そこで、本学看護学科においても総括評価に取り組むこととなった。評価に際し、卒業生による評価の実施を検討したが、現

住所等の確認が困難であること、2001年度のアンケート調査での回収率が低かったことから、今回は現行カリキュラムを修了した3年次生を対象としたカリキュラム評価とした。

III. 評価内容および方法

1. 対象

本学看護学科の全カリキュラムを修了した、2010年3月卒業予定の看護学科3年次生76名

2. 調査時期

2010年1月（看護学科全カリキュラム終了後）

3. 評価方法

無記名自記式質問紙による評価を実施した。評価内容は「学習の領域別評価」6項目、「授業（実習含む）の全体評価」10項目、「学習支援状況に対する評価」10項目、および看護学科教育目標を基に作成した「学生の卒業時の特性評価」23項目からなる。それぞれ自由記載1項目を含み、その他の項目は「そう思う（5点）」「ややそう思う（4点）」「どちらともいえない（3点）」「あまりそう思わない（2点）」「そう思わない（1点）」の5段階評定とし、得点が高いほど良い評価となるよう設定した。質問紙は教室内で一斉配布し、回収は回収箱を設置して、

表1 学習領域評価

N=67

項目	そう思う・ややそう 思う(%)	どちらともいえない (%)	あまりそう思わない・ そう思わない(%)
1 一般基礎領域科目や開講時期、時間数は良 かった	42 (62.7)	18 (26.9)	7 (10.4)
2 専門基礎領域科目や開講時期、時間数は良 かった	46 (68.7)	16 (23.9)	5 (7.5)
3 各看護学の講義科目や開講時期、時間数は良 かった	49 (73.1)	12 (17.9)	6 (9.0)
4 各看護学の実習科目や開講時期、時間数は良 かった	50 (74.6)	14 (20.9)	3 (4.5)
5 看護の発展領域(看護特論、看護研究)の科目 や開講時期、時間数は良かった	34 (50.7)	19 (28.4)	14 (20.9)

協力に同意したものに提出を求めた。

4. 分析方法

質問項目毎に回答分布を求めた。次に「卒業時の特性評価」について項目別平均値を算出し、項目毎の評価の高さを比較した。さらに項目間のSpearmanの相関係数を求めた。

IV. 倫理的配慮

質問紙は無記名とし、調査の目的や意義、回答は統計的に処理し個人が特定されることはないこと、調査協力は自由意思であり協力しなくても不利益は生じないこと、結果は年報・論文等で公表すること、回答は5年間保存し将来カリキュラム評価に用いることがあること等を文書と口頭で説明し、回収箱への提出をもって同意とみなした。尚、本調査と結果の公表に関して、本学看護学科会議及び研究倫理審査委員会の承認を得た。

V. 結 果

調査当日に欠席した2名を除く74名に配布し、回収数は68名(回収率91.9%)であった。無回答のものを除外し、有効回答数は67名(有効回収率90.5%)であった。

1. 学習領域評価

開講科目・時期・時間数について、学習領域別に良かった(「そう思う」「ややそう思

う)」と回答したものの割合を比較すると、最も割合が多かったのは看護学で、看護実習が74.6%、看護学の講義が73.1%であった。次いで解剖生理学・臨床病態学などの専門基礎領域が68.7%、心理学・情報科学・英語などの一般基礎領域は62.7%であった。ただし、看護の発展領域(看護特論・看護研究)については、良かったとの評価が50.7%にとどまり、20.9%は「そう思わない」「あまりそう思わない」という否定的回答であった。また自由記載では実習と発展領域との両立が大変であったとの意見もみられた(表1)。

2. 授業(実習含む)全体評価

肯定的回答(「そう思う」「ややそう思う)」が多かったのは、「学びの多い実習が多かった」88.1%、「自分の視野を広げるのに役立つ授業科目が多かった」76.1%、「しっかり勉強しないと単位の取得が難しい授業が多かった」73.1%、「興味深い授業が多かった」68.7%などで、半数以上が肯定的な評価をしている項目が多かった。しかし、「一般教養的な授業が充実していた」は肯定的回答が25.4%、否定的回答(「あまりそう思わない」「そう思わない)」が37.3%であり、「選択できる授業科目が豊富に用意されていた」は肯定的回答が38.8%、また否定的回答が31.3%であった(表2)。

3. 学習支援状況評価

「全体的にみて、本学で学習できたことは良かった」という項目に89.6%が「そう思う」「や

表2 授業（実習含む）全体評価

N=67

項目	そう思う・ややそう思う(%)	どちらともいえない(%)	あまりそう思わない・そう思わない(%)	無回答(%)
7 興味深い授業が多かった	46 (68.7)	12 (17.9)	9 (13.4)	0 (0.0)
8 教材が良く研究されている授業が多かった	27 (40.3)	29 (43.3)	10 (14.9)	1 (1.5)
9 しっかり勉強しないと単位の取得が難しい授業が多かった	49 (73.1)	13 (19.4)	5 (7.5)	0 (0.0)
10 しっかり勉強しないと単位の取得が難しい実習が多かった	44 (65.7)	17 (25.4)	6 (9.0)	0 (0.0)
11 一般教養的な授業が充実していた	17 (25.4)	25 (37.3)	25 (37.3)	0 (0.0)
12 学びの多い実習が多かった	59 (88.1)	7 (10.4)	1 (1.5)	0 (0.0)
13 自分の視野を広げるのに役立つ授業科目が多かった	51 (76.1)	13 (19.4)	3 (4.5)	0 (0.0)
14 選択できる授業科目が豊富に用意されていた	26 (38.8)	20 (29.9)	21 (31.3)	0 (0.0)
15 シラバスと実際の授業の内容はよく連動していた	39 (58.2)	24 (35.8)	3 (4.5)	1 (1.5)

表3 学習支援状況評価

N=67

項目	そう思う・ややそう思う(%)	どちらともいえない(%)	あまりそう思わない・そう思わない(%)
17 パソコンやインターネット環境は十分であった	34 (50.7)	17 (25.4)	16 (23.9)
18 図書館の蔵書や雑誌は最新・広範囲で活用しやすかった	55 (82.1)	5 (7.5)	7 (10.4)
19 学生の意見が授業(実習を含む)に反映する仕組みがあった	36 (53.7)	21 (31.3)	10 (14.9)
20 自己学習をするための視聴覚教材は十分であった	44 (65.7)	16 (23.9)	7 (10.4)
21 自己学習をするための看護技術に関わる設備、物品は活用しやすかった	47 (70.1)	13 (19.4)	7 (10.4)
22 実習施設の設備は、実習環境として整っていた	60 (89.6)	5 (7.5)	2 (3.0)
23 実習において、教員や指導者等の支援体制は整っていた	53 (79.1)	9 (13.4)	5 (7.5)
24 教職員は学生の関心事に耳を傾け、近づきやすい存在であった	44 (65.7)	14 (20.9)	9 (13.4)
25 全体的にみて、本学で学習できたことは良かった	60 (89.6)	6 (9.0)	1 (1.5)

「やそう思う」と回答しており、総合的に良い評価をしたものが多かった。具体的な内容では「実習施設の設備は、実習環境として整っていた」89.6%、「図書館の蔵書や雑誌は最新・広範囲で活用しやすかった」82.1%、「実習において、教員や指導者等の支援体制は整っていた」79.1%など、実習や図書館の評価が高かった。一方、「パソコンやインターネット環境は十分であった」は肯定的回答が50.7%、「学生の意見が授業（実習を含む）に反映する仕組みがあった」は53.7%であり、自由記載でもパソコンの台数や利用時間に関する不満がみられた（表3）。

4. 学生の卒業時の特性評価

22項目中肯定的回答（「そう思う」「ややそう思う」）をしたものが90%以上であった項目が7項目、80%台であった項目が9項目、70%台であったものが5項目、60%台が1項目であった。否定的回答（「あまりそう思わない」「そう思わない」）をしたものはいずれも10%以下であり、全項目において良い評価をしている学生が多かった。肯定的回答が90%以上であった項目は「他者の価値観を尊重することの大切さがわかった」94.0%、「対象の状況を判断し、ニーズを把握することができるようになった」94.0%、「プライバシーと秘密保持に関わる行

表4 卒業時の特性評価

N=67

項目	そう思う・ややそう 思う(%)	どちらともいえない (%)	あまりそう思わない・ そう思わない(%)	無回答(%)
27 人との信頼関係を基盤とした人間関係を形成できるようになった	58 (86.6)	7 (10.4)	2 (3.0)	0 (0.0)
28 人々に共感をもって接することができるようになった	60 (89.6)	7 (10.4)	0 (0.0)	0 (0.0)
29 他者の価値観を尊重することの大切さがわかった	63 (94.0)	4 (6.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
30 看護の対象者を様々な側面から理解する視点が身についた	61 (91.0)	6 (9.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
31 対象の状況を判断し、ニーズを把握することができるようになった	63 (94.0)	4 (6.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
32 事実に基づいて多角的に物事を分析できるようになった	55 (82.1)	11 (16.4)	1 (1.5)	0 (0.0)
33 対象の状況に応じた援助計画を立案できるようになった	58 (86.6)	8 (11.9)	1 (1.5)	0 (0.0)
34 安全に配慮した基本的な看護技術を修得することができた	61 (91.0)	6 (9.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
35 看護学科で学んだ原理原則を活かして個々の対象に応用できるようになった	54 (80.6)	10 (14.9)	2 (3.0)	1 (1.5)
36 コミュニケーションを円滑にとりながらケアを提供できるようになった	58 (86.6)	8 (11.9)	1 (1.5)	0 (0.0)
37 自分の看護実践の過程を評価できるようになった	51 (76.1)	12 (17.9)	4 (6.0)	0 (0.0)
38 看護者として生命と人権を尊重した倫理的な判断ができるようになった	60 (89.6)	7 (10.4)	0 (0.0)	0 (0.0)
39 自己を客観視し、自律的に行動できるようになった	53 (79.1)	14 (20.9)	0 (0.0)	0 (0.0)
40 チームで協働して活動するための個々の役割や責任についてわかった	63 (94.0)	4 (6.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
41 専門職者としてふさわしい言葉遣いやマナーを身につけることができた	62 (92.5)	4 (6.0)	1 (1.5)	0 (0.0)
42 プライバシーと秘密保持に関わる行動がとれるようになった	63 (94.0)	4 (6.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
43 看護について幅広い知見を得ることができた	60 (89.6)	6 (9.0)	1 (1.5)	0 (0.0)
44 様々な問題に取り組む自信をもつことができた	43 (64.2)	18 (26.9)	6 (9.0)	0 (0.0)
45 看護専門職者としての責任を自覚することができた	55 (82.1)	9 (13.4)	3 (4.5)	0 (0.0)
46 看護専門職者としての誇りをもつことができた	49 (73.1)	11 (16.4)	6 (9.0)	1 (1.5)
47 看護について、もっと勉強をしたいと思うようになった	50 (74.6)	12 (17.9)	5 (7.5)	0 (0.0)
48 看護職として、将来への展望をもつことができた	51 (76.1)	11 (16.4)	5 (7.5)	0 (0.0)

動がとれるようになった」94.0%、「チームで協働して活動するための個々の役割や責任についてわかった」94.0%、「専門職者としてふさわしい言葉遣いやマナーを身につけることができた」92.5%、「安全に配慮した基本的な看護技術を修得することができた」91.0%、「看護の対象者を様々な側面から理解する視点が身についた」91.0%であった(表4)。

次に、各項目の評価の高さを平均値で比較すると、特に評価が高かったのは「プライバシー

と秘密保持に関わる行動がとれるようになった」 4.54 ± 0.61 、「他者の価値観を尊重することの大切さがわかった」 4.51 ± 0.61 、「チームで協働して活動するための個々の役割や責任についてわかった」 4.33 ± 0.59 、「看護者として生命と人権を尊重した倫理的な判断ができるようになった」 4.25 ± 0.64 、「専門職者としてふさわしい言葉遣いやマナーを身につけることができた」 4.27 ± 0.71 、「人々に共感をもって接することができるようになった」 4.22 ± 0.62 、「看護の

表5 学生の特性評価平均値

項目	N	M	SD
42 プライバシーと秘密保持に関わる行動がとれるようになった	67	4.54	0.61
29 他者の価値観を尊重することの大切さがわかった	67	4.51	0.61
40 チームで協働して活動するための個々の役割や責任についてわかった	67	4.33	0.59
41 専門職者としてふさわしい言葉遣いやマナーを身につけることができた	67	4.27	0.71
38 看護者として生命と人権を尊重した倫理的な判断ができるようになった	67	4.25	0.64
28 人々に共感をもって接することができるようになった	67	4.22	0.62
30 看護の対象者を様々な側面から理解する視点が身についた	67	4.21	0.59
34 安全に配慮した基本的な看護技術を修得することができた	67	4.19	0.58
36 コミュニケーションを円滑にとりながらケアを提供できるようになった	67	4.18	0.69
43 看護について幅広い知見を得ることができた	67	4.18	0.65
31 対象の状況を判断し、ニーズを把握することができるようになった	67	4.16	0.51
33 対象の状況に応じた援助計画を立案できるようになった	67	4.09	0.65
45 看護専門職者としての責任を自覚することができた	67	4.09	0.85
47 看護について、もっと勉強をしたいと思うようになった	67	4.07	1.03
39 自己を客観視し、自律的に行動できるようになった	67	4.00	0.65
48 看護職として、将来への展望をもつことができた	67	4.00	0.98
27 人との信頼関係を基盤とした人間関係を形成できるようになった	67	3.99	0.62
32 事実に基づいて多角的に物事を分析できるようになった	67	3.97	0.63
35 看護学科で学んだ原理原則を活かして個々の対象に応用できるようになった	66	3.88	0.60
37 自分の看護実践の過程を評価できるようになった	67	3.87	0.76
46 看護専門職者としての誇りをもつことができた	66	3.82	0.88
44 様々な問題に取り組む自信をもつことができた	67	3.69	0.87

表6 「様々な問題に取り組む自信」と0.4以上の比較的強い相関があった項目

項目	N	相関係数	有意確率
46 看護専門職者としての誇りをもつことができた	66	0.59	***
38 看護者として生命と人権を尊重した倫理的な判断ができるようになった	67	0.57	***
48 看護職として、将来への展望をもつことができた	67	0.55	***
37 自分の看護実践の過程を評価できるようになった	67	0.54	***
39 自己を客観視し、自律的に行動できるようになった	67	0.51	***
47 看護について、もっと勉強をしたいと思うようになった	67	0.49	***
36 コミュニケーションを円滑にとりながらケアを提供できるようになった	67	0.46	***
40 チームで協働して活動するための個々の役割や責任についてわかった	67	0.46	***
32 事実に基づいて多角的に物事を分析できるようになった	67	0.44	***
45 看護専門職者としての責任を自覚することができた	67	0.41	**

*P<0.01 **P<0.001

対象者を様々な側面から理解する視点が身についた」4.21±0.59などであった。

一方、相対的にみて評価が低かったのは、「様々な問題に取り組む自信をもつことができ

た」3.69±0.87, 「看護専門職者としての誇りをもつことができた」3.82±0.88, 「自分の看護実践の過程を評価できるようになった」3.87±0.76, 「看護学科で学んだ原理原則を活かして

個々の対象に応用できるようになった」 3.88 ± 0.60 、「事実に基づいて多角的に物事を分析できるようになった」 3.97 ± 0.63 であった(表5)。

次に最も平均値の低かった「様々な問題に取り組む自信」と他の項目との相関をみると、0.4以上の比較的強い正の相関が10項目にみられた。相関係数が大きい順にみると「看護専門職としての誇り」($r_s = 0.59$)、「生命と人権を尊重した倫理的判断」($r_s = 0.57$)、「将来への展望」($r_s = 0.55$)、「自分の看護実践過程の評価」($r_s = 0.54$)、「自己の客観視と自律的行動」($r_s = 0.51$)であった(表6)。

VI. 考 察

1. 学習領域, 授業全体, 学習支援

学習領域別の評価では看護学の実習・講義の評価が高かったが、一般基礎領域の評価はやや低かった。授業全体に関する評価でも一般教養的授業の充実や選択科目数に関する評価が低かった。本学が看護師国家試験受験資格の取得を目指した専門教育課程であることを踏まえると、看護学の評価が高いことは望ましい結果であるが、一般基礎科目には課題を残した。単純に比較はできないが、2001年度の評価では学生の約8割が教養・基礎教育分野の単位数を適切と評価し、看護専門分野の学習をする上でも、幅広い教養を養う上でも役立っていると評価している(島根県立看護短期大学自己評価委員会, 2004)。2001年度の評価で授業の過密さが課題となり、一般教養科目を見直したことも一因と思われる。人間を対象とする看護職には幅広い知見と人間的素養が求められる。国家試験受験資格の指定規則がある中で困難が予想されるが、今後のカリキュラム改正において、改めて教養科目の見直しが必要であると考えられる。

一方、評価の高かった看護学において「看護の発展領域」は良い評価が約半数にとどまった。自由記載から推測すると3年次の実習との両立に困難を感じていると考えられる。この分野は2001年度の評価では卒業研究に対し、約3割の学生が負担感などを理由になくしてもよいと回答した一方で約4割が意義を感じて必要としていた(島根県立看護短期大学自己評価委員会,

2004)。現在のカリキュラムでは3年前期で研究計画書作成またはケースレポート作成を課しており、看護特論を含めて以前とは内容を変更している。今回肯定的回答が増加し、否定的回答が減少していることから、3年次の負担軽減には一定の効果があったと考えられる。看護特論や看護研究は卒業後の学習力につながる科目であり、学生にはその意義を説明することで負担感を軽減していくことも必要である。

学習支援に関しては、実習環境(人的・物的)と図書館の評価が高かった。一方、パソコン・インターネット環境や学生の意見を反映する仕組みについての評価は低かった。パソコン・インターネット環境については、2001年度は評価が高かったが(島根県立看護短期大学自己評価委員会, 2004)、時代の変化に伴い現在のシステム環境では満足が得られなくなっていると思われる。今後、さらにパソコン・インターネット環境を整えていく必要がある。

2. 卒業時の特性評価

卒業時の特性評価では、ほぼ全ての項目について7割から9割の学生が肯定的回答をしており、教育目標に照らして作成した項目をほぼ身につけることができたと考えていた。特に評価が高かったのは「プライバシーや秘密保持」「他者の価値観の尊重」「生命と人権の尊重」「言葉使いやマナー」「個々の役割や責任」といった“倫理的判断や態度”,そして「人々に共感をもって接する」「対象を様々な側面から理解する視点」といった“対象の理解”に関するもので、本学の学生は、3年間の教育で倫理観や他者理解について特に力をつけていると考えられた。

一方相対的にみると、「様々な問題に取り組む自信」は肯定的回答が6割程度、平均値も3.69と比較的低く、また「看護専門職としての誇り」「原理原則を活かして個々の対象に応用する力」「自分の看護実践過程の評価」もやや低い傾向があった。さらに「様々な問題に取り組む自信」と他の項目との相関では、比較的強い正の相関があったのは「看護専門職としての誇り」「生命と人権を尊重した倫理的判断」「看護職としての将来展望」といった看護職という職業に対する価値観や、「自分の看護実践の過程を評価

できる」「自己を客観視し自立的な行動ができる」などの客観的な分析力や評価力に関する項目であった。看護学科では「看護基本技術自己評価表」や「臨地実習看護過程自己評価表」を活用し、看護実践能力の育成を図ってきたが、今後は技術的実践力とともに客観的分析力の育成を強化していく必要があると考えられる。それらを通して、学生が自らの将来に展望を持ち、自信を持って社会に出て行けるよう支援していくことが重要であると思われる。

VI. ま と め

看護学科カリキュラムを終了した3年次生を対象にカリキュラム評価を実施した。

学習領域・授業全体・学習支援状況について、学生は概ね高い評価をしていた。特に実習、看護学の評価が高かったが、一般教養科目の充実や選択科目数、看護の発展領域の学生の負担感、パソコン・インターネット環境については検討課題が残った。

また、卒業時点の特性評価では、学生の評価は概ね高く、教育目標に照らして学生のほとんどが求められる力を身につけたと評価していた。ことに倫理的判断や態度、他者理解の評価が高かった。

VII. 結 語

今回のカリキュラム評価は学生による評価である。学生の卒業時の特性評価も自己評価であり、客観的に能力を評価したものではない。今後は職場等からの客観的評価も検討しながら、カリキュラムの改善に向けて、継続的に評価を実施していく必要がある。

引用文献

菱沼典子，及川郁子，長江弘子，射場典子，亀井智子，有森直子（2006）：2000年度から2004年度カリキュラム総括評価－その2 科目評価について－，聖路加看護大学紀要，32，65－69。
野田節子，雄西智恵美，石井美里，岩永秀子，

岡部明子，荻野夏子，児玉千代子，佐々木哲二，佐藤節子，式守晴子，志水恵子，高橋奈津子（2005）：東海大学健康科学部看護学科におけるカリキュラム評価システムの構築－卒業生によるカリキュラム評価アンケートの作成－，東海大学健康科学部紀要，11，51－55。

及川郁子，菱沼典子，亀井智子，長江弘子，射場典子，有森直子（2006）：2000年度から2004年度カリキュラム総括評価－その1 4年ごとの評価より－，聖路加看護大学紀要，32，59－64。

島根県立看護短期大学自己評価委員会（2004）：自己点検・評価報告書Ⅱ，島根県立看護短期大学，5－18。

三島三代子・田原 和美・吉川 洋子・加藤 真紀

Summary of Curriculum Comprehensive Evaluation by Students of Department of Nursing

Miyoko MISHIMA, Kazumi TAWARA, Yoko YOSHIKAWA and Maki KATO

Key Words and Phrases : Curriculum Evaluation, Department of Nursing,
Students